



(金 沢)

上荒屋遺跡は、手取川扇状地の扇端に立地し、前近代までは安原川を使って荷揚げがされた水運の便が良い所である。木簡は、一九九〇年の調査で五四点、一九九一年の調査で二点、合計五六点が出土している。それらは奈良・平安時代の初期荘園の経営などに関わるもので、九世紀代の遺構は東大寺領横江荘と推定されている。今回木簡の出土した遺構は、一九九〇年の

石川・上荒屋遺跡

かみあらや

- 1 所在地 石川県金沢市上荒屋六丁目
- 2 調査期間 一九九一年(平3)五月～一〇月
- 3 発掘機関 金沢市教育委員会
- 4 調査担当者 出越茂和・小西昌志
- 5 遺跡の種類 荘園跡・集落跡・墓域
- 6 遺跡の年代 弥生中期、古墳前期、奈良・平安・鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

木簡と同じく河川跡SD四〇(幅約八m、深さ約二m)で、その上流(東方)からの出土である(詳細は『木簡研究』一三を参照されたい)。

8 木簡の釈文・内容

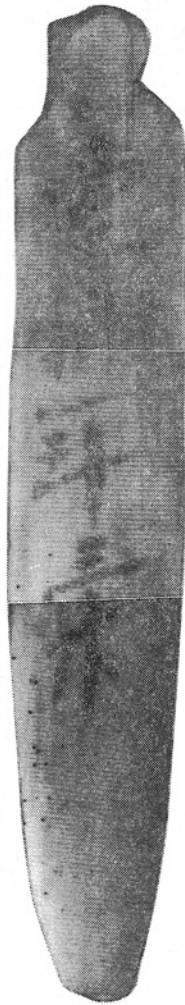
- (1) 別止万呂、服マ安万呂二人
万呂、福継、三田万呂
(161)×(35)×4 081
137×245 033
- (2) 「<老斛一斗三升」

(1)は、各人名の上部に墨点を施しており、当遺跡では『木簡研究』一三号掲載の(2)に次いで二例目であり、墨点はなんらかの勘検の跡と考えられる。なお、一三号掲載(4)の表、最初の部分は、「別止万呂十一束」と読んで、(1)の別止万呂と同一人とみてよさそうである。(2)は上端の左右に切り込みのある付札木簡で、当遺跡では類例が全部で八点あり、その内、数量が記載されているのは六点である。一般に左右に切り込みのない「白米」「黒米」の付札木簡は五斗が基本的な数量であるが、上述の六点は、一三号所載(5)の「粗種一石二斗」の他は品目が記入されておらず、また、その量目はすべて一石以上である。なお、木簡の釈読は、国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

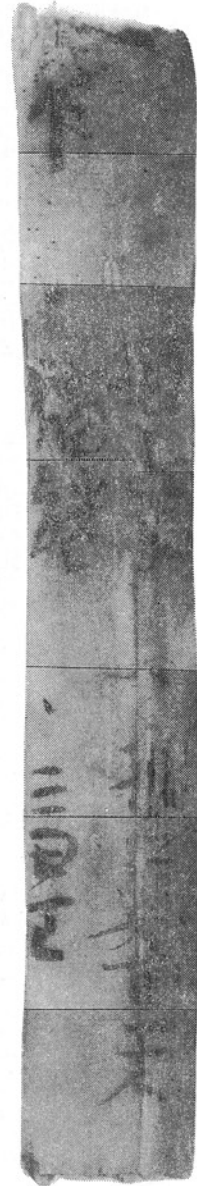
9 関係文献

金沢市教育委員会『金沢市上荒屋遺跡概報』(一九九一年)

(小西昌志)



(2)



(1)